

荻野吟子、最期の様子

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎 泰弘

埼玉の三偉人のひとりで、日本における公許女医第 1 号の荻野吟子は、大正 2(1913)年 6 月 23 日、東京本所区新小梅町(現在の東京都墨田区向島)で没しました。当館が令和 4 年度に購入した資料の中に、吟子が亡くなる 1 週間ほど前に親族の秋元尚寿(ひさとし)から出された葉書がありますので、それを手がかりにその様子を見てみましょう。



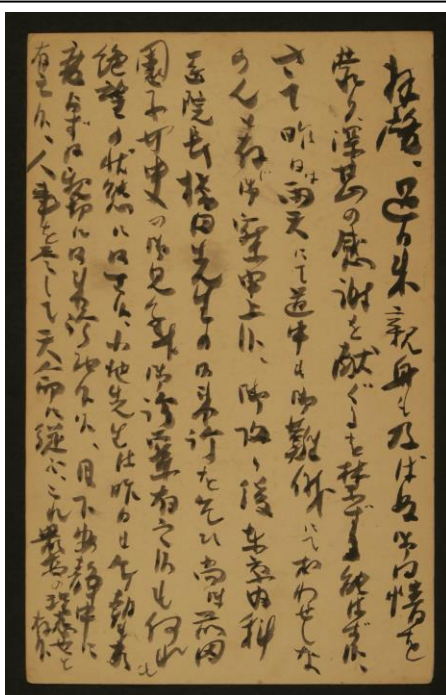
画像 1 田中かく子宛秋元尚寿の葉書

秋元尚寿は、吟子の姪(2 番目の姉奥澤きくの娘光子)の夫で、東京の神田錦町で雑誌『交通世界』の印刷・発行を行い、また吟子と同じ本郷教会で受洗(キリスト教の洗礼をうけること)して同会を物心両面から支えました。また吟子の姉の野口友子とともに吟子の墓地(雑司ヶ谷霊園)の選定にあたりました。

その秋元が 6 月 16 日に飯能町の田中かく子(荻野吟子の親友、「今月の一品」令和 5 年 9 月の解説参照)に出した葉書は、その前日(15 日)にかく子が見舞いに来たことの御礼から始まっています。そしてその後、東京内科医院長の橋田と公許女医第 12 号の前田園子が診察したところいずれも「絶望の状態」との見立てで、そのほか「小池先生」なる医師も毎日のように来診していたことが記され、吟子には回復を願って多くの医師が関わっていたことがうかがえます。

吟子の病ですが、この年の 3 月 23 日から肋膜炎にかかり臥せっている状態にありました(4 月 13 日瀬谷貞司宛荻野吟子書簡、『熊谷市史調査報告書 荻野吟子 -その歩みと出会い-』No.164、以下『報告書』と略)。また、6 月 25 日の読売新聞に掲載された訃報には 6 月 11 日に突然脳溢血を起こして昏睡状態に陥っていたとされています(『報告書』No.170)。肋膜炎は胸の病ですので、吟子は肋膜炎を患っていたところに脳溢血を起こして危篤となり、6 月 23 日に死去したことになります。つまり秋元が葉書で触れた吟子の「絶望の状態」とは、もはや手の施しようのない状態に陥っていたことを指していると思われます。それでも秋元は諦めず、「人事を尽くして天命に従う」しかないと結んでいます。

吟子の親族には東京に出て活躍している人も多く、晩年の吟子は、友人、医師、親族など多くの人に囲まれ、62 年の生涯を閉じたのです。



画像 2 同文面

【参考文献】

熊谷市『熊谷市史調査報告書 荻野吟子 -その歩みと出会い-』
令和 5(2023)年 3 月

拝啓、過日来親身も及ばぬ御同情を蒙り、深甚の感謝を献ぐるを禁ずる能はず候(そうろう)、さて昨日は雨天にて道中も御難儀にておわせしならんと存じ御察申上候、御帰りに後東京内科医院長橋田先生の御来行をそひ、尚ほ前田園子女史のお見舞御診察有之(これあり)候も、何れも絶望の状態に御座候(ござそうろう)、小池先生は昨日も今朝も相変わらず御親切に御来診被下(くだされ)候、目下安静中に有之候、人事を尽くして天命に従ふ、これ最高の理口也と
存候